

い。然るにそれ自體の矛盾と財政の窮乏に依つて一時廢された此の制度が再び徳宗貞元四年に復活されることとなり、此度は左右街功德使等に依つて僧尼は統管さるゝに至り、かくて、憲宗の元和二年には道士女官もその所管に移ることとなつた。而して、此の職に任ぜられたものは、依然宦官禁軍の武將であつたとする。更に又、かゝる人々が此の職に就いた理由を精神的物質的の二方面に求めて居る、猶此の外、功德の語義に就いても説明するところがあり、有名な園城寺所藏の唐過所に見える功德は原義が轉じて諸佛具、幡蓋その他佛畫等の如き供養三寶の爲に供せらるべき品物を呼ぶ名稱と述べて居る。蓋し卓見であらう。此の論文は僅か四十頁に満たない短いものではあるが、長安佛教の性質を明かにし、これに止まらず從來殆ど看過されて居た佛教法制史上に新なる注意を喚起して居る。

### ●越前若狭古文書選

#### 牧野信之助選

選者牧野信之助氏が福井縣に在職して福井縣史の編纂に着手されたのは大正五年の事であつたが、それより氏は同縣下の史料を善く歴訪して刻苦精勵、五ヶ年の歳月を経て福井縣史の大業を成し遂げられたのであつた。其後氏は名著「武家時代社會の研究」を公刊されると共に、滋賀縣史、堺市史の編纂等も主られ、何れも精密、廣博なる事實の上に立ち、地方史を説き乍ら、常に全體史との關連に留意さるゝ所があつた。地方史の進

むべき方向は、氏によつて提示されしもの多きを知るのである。

本書は三秀舎主島連太郎氏が創業三十年記念出版として、その郷土に關係ある著作を出版したものの、一なのである。即ち平泉博士の解説を加へられたる「白山本神皇正統記」と、上田三平氏の「越前及若狭地方の史蹟」に駢んで、本書は福井縣を理解する上に最も根本的な史料たるべき古文書を選輯されたものである。往年福井縣史の編纂に際しては約四千通の文書が採訪されたのであつたが、本書はその中から周到なる注意を以て選擇を行ひ、寄進狀、寶券、禁制、五人組例言等は夫々各時代の代表的なるもの二三に止め、他は省略された様である。また目ばしい花押はその影寫を實物大に複製して文書の間に加へ、外に主要なる文書四十餘通を玻璃版として挿入する等の良き注意が拂はれて居る。なほ外に各所藏者について、文書の本文を擧ぐるに先立つて、社寺、家の由來を夫々解説する所あり、地圖によつて所藏者の所在を明示する等、單純なる史料集といふだけではなく、利用者に對する各方面からの親切が怠られて居ない。殊に最後の時代別索引は最も重寶なものである。

本書と共に出版された神皇正統記の複製等もその一つであるが、この様な根本的な史料の出版が國史學界に次第に興りつゝある様である。その意味は從來の著述されし歴史が汗牛充棟も當ならざる狀勢の中にあつて、今一度、原典の根本からの再討究を試み、然る後從來の歴史を批判せんとする學界の一傾向に合致せんとするものでなからうか。福井縣史にたゞさばつて居

た當時から獨り著者の懐いて實現しなかつたこの史料集が、今出版されて斯界に好評を以て迎へられてゐるといふのもこの學界の傾向に投合するものであらう。更にいへばそれは大正十一年に成りし福井縣史の史料集といふだけではなく、この史料集によつて新しい福井縣史が頗みられるといふ意味を持つものであらう。(菊判、本文八四五頁、圖版四十二葉、三秀社發行、定價九圓)〔福尾〕

### ●春日神社文書 第貳

去昭和三年の春始めて公刊せられた春日神社文書の第一巻は嘗にその豊富なる内容に於てのみでなく、その整備せる編纂體例に於て、正にこの種の出版中の白眉と稱せらるべきものであつた。殊にその巻末に人名地名件名等の詳細な索引を附したことは、大日本古文書の編纂に於てさへも未だ能くなし得なかつたところ、その勞苦とその親切とは永く研究者の感謝を受くるに値するものであつたが、この度同じ綿密の用意を以て編纂せられた續編が前巻の公刊以後五年にして漸く出版せられるに至つた。前巻に收められた六百幾通の文書は既に早く一度神社に於て整理せられてあつたものであるに對し、この度のものは多く反古同様に篋底に藏せられてゐたものといへば、その整理と原稿作成の苦心は前巻に倍するものがあつたであらう。併しそれだけにまた、その内容はこの度始めて世に紹介せらるゝわけに舊職であつた正眞院家を始め現舊社家に傳へられた文書の

併せて載録せられたことは最もよろこばしいことである。

今就中注意すべきものは二三を挙げれば、興福寺叢會の議によつて春日野參道の兩側に植うべき柳櫻各一本を塔頭諸院に課した建長三年の請定、同じく叢會の議に基く廻廊修造石並に形本經藏石の各支配注文の如きは、その事柄の些末なるにもか、はらず興味ある文書であり、また近世能樂三座がその本據を江戸に遷さんとした前後、神事の關念を憂へて、しきりに之を止めんとした興福寺五師役者連署の奉行所宛口上書の如き、他に史料乏しきこの方面の研究に裨益するところが多いであらう。而して若し社領の莊園やその諸職その他一般社會經濟史的史料に至つてはもとより一々枚舉せらるべくもない。本書中に現はれる莊園のみを列舉しても三百の餘に上るであらう。正眞院家舊藏のもの、中では擁津垂水西牧に關する後白河院近衛基通及源義經等の西海道追討使兵士糧米停止に就ての文書が最も珍しいものである。(總通數七百九十七(菊判千九百九頁)圖版十六、索引六十二頁、東京上田泰文堂發行、定價未詳)〔柴田〕

### ●世外井上公傳 五卷

世外井上馨侯に關しては、明治四十年、中原邦平氏によつて「井上伯傳」編まれ、大正十年、澤田章氏編にかゝる「世外侯事歴維新財政談」が公刊せられた。併し、前者は明治戊辰の役の時を以て筆を擱き、世外侯眞の活躍期なる明治以後を缺き、書の名付けられたるところと、其内容甚だしき隔りを有し、僅かに、侯が幕末期に於て既に後年雄飛すべき素質を現はし始め